医学図書館とD I活動

Medical Library and Drug Information

札幌医科大学附属図書館

野口 迪子*

1. はじめに

最近では医学図書館員でもD I (Drug Information) とは何かということを知らない人はいないかと思う。福室¹⁾による東大病院薬剤部のD I活動が“医学図書館”に紹介され、その中では医学・薬学図書館との協力関係が必要であることを強調しており、医療情報活動の一環としてのD Iに対する認識が一層問われるようになってきた。

また今から凡そ10年前、金尾²⁾は“D Iはドクメンテーション活動の一分野であり、情報活動の基幹をなす図書館ともドクメンテーションとも協力態勢をとりながら歩んでいかなければならない。アメリカでは当然のこととしてその前提のもとにD I活動がすすめられているのに、わが国では必らずしもそういう手順をへていなかった”，とわが国のD I活動のあり方に反省をあたえながら、一方これには図書館側にも責任があり従来の図書館のあり方にわが国の図書館行政の貧しさを指摘している。また金尾³⁾は当初からドクメンテーションに力を入れてきたからこれが正しくD I活動の基として発展してきたならば図書館とのつながりは当然でてきたのではなかったかと推察する。

しかしわが身にふりかえって医学図書館員自身はどう考えていたか。病院薬剤師が主体であるから当然病院図書室がかかわるべきことだと思い、また医薬品が化学に基づいていることからこれについての専門分野は薬学図書館が関与するのが妥当だと積極的に理解しようとはしていなかったように思われる。

著者は所属している大学の病院薬剤師をはじめ薬剤部に研究員として席を置く北海道内地方の薬剤師の方々と

コミュニケーションをもつ機会を得てから凡そ4年を経過した。その間に共同研究で、1975年から一般会員にオープンとなった日本薬学会年会文献情報管理部会で発表⁴⁾することになったり、D I活動とはどんなことか、医学図書館に求められているものは何か、われわれはD I活動にどのように協力できるか、そのためには何が必要かを考えてきた。しかし今や情報活動の一つとして定着したかのように思われるD I活動を医学図書館が他山の石として眺めているにすぎないのは遺憾である。

2. D Iとは何か

D Iとは Drug Information の頭文字をとって略字としたもので、わが国では医療情報関係でD Iといえは医薬品情報を意味しているが、アメリカではこのように略しているのをみなかった。D Iについての定義はD I活動とは何かということと一緒に含めて色々と説明されるが、Collins⁵⁾の Handbook によるとアメリカでは Univ. of Alabama Hospital で最初に用いられた定義をあげている。

Drug Information is any objective, scientifically derived and documented data or knowledge involving the pharmacological, toxicological, and therapeutic use of drugs. Drug information includes, but is not limited to, such particular items of knowledge as chemical names, structures and properties, identification, diagnostic or therapeutic indications, mechanisms of action, time of onset and duration of action, recommended doses and dosage schedules, administration, absorption, metabolism, detoxification, excretion, side effects, adverse reactions, contraindications, interactions, chemical and therapeutic incompatibilities costs, advantages, signs, symptoms and treatments of toxicities, clinical efficacy, comparative

*Michiko NOGUCHI : Library of Sapporo Medical College

(昭和53年4月4日受理)

data, clinical data, drug use data, and any other information useful in the diagnosis and treatment of patients with drugs. Drug information does not include advertising material, drug detailing, clinical impressions, "testimonial" type reporting, inventory control, or purchasing information.

わが国でもやはりそれぞれの見方があるが金尾⁶⁾によればD Iとは次のように学生の講義録に付して解説をしている。われわれにとってもわかり易いものとして引用させてもらう。

"D I 医薬品情報(注意:薬学情報ではない) 医薬品情報を扱う場合、だれが、どこでつかってもD Iと言って差支えないと思われるが、現実には病院薬剤師、開局薬剤師などが医師もしくは患者に対して提供する医薬品に関する情報をD Iと限定する場合が多い。従ってわが国では製薬企業などが行う医薬品情報活動はD Iとはいわない"。

3. D I 活動に関する文献調査から

D I 活動はどのようにして展開されてきたか。福室⁷⁾によれば日本のD I 活動の幕あけは第一回国公私立大学病院薬剤部(薬局)職員研修会(1962)といわれている。D Iに関する講演の一覧表にその時代のトピックスがうかがえる。なお詳細には"月刊薬事"19巻10号と11号

(1977)の二回にわたってドラッグインフォメーションが特集としてとりあげられているので、その中の堀岡⁸⁾による日本のD Iの歴史から得られる。同時に高杉⁹⁾は米国におけるD I活動の歴史と現況を述べているが、日本のD Iが病院薬局を中心に発達し組織・管理の点から内に定着しつつあり、また独自の資料作りにあるのに対して米国のD Iは医学文献の利用のためIndex Medicusを加え、医学図書館の活用をしていったことが明記され図書館との関係に具体的なつながりが見られる。

図書館員として金居¹⁰⁾は1967年にすでにD I活動の重要性を認識し、世界的に視野を拡げてその主要機関の活動情況、出版物の速報性や発行状況を調査し、その収集・処理の方法において国家的・国際的協力体制の確立の要求されている点など、特に主導権をにぎっている米国に焦点をあわせてreviewしている。この中では日本では1965年の薬学大会を機会に一段と飛躍をとげたことと、1967年の時点でのわが国のD I活動における情報の流れ図(金居素健:情報活動の重要性)を紹介している。

一方アメリカにおけるD I活動のあゆみとして、1972年までをカバーする414文献を付しているreviewは重要であり、それに関連する文献リストは表1に示した。表1, No 1は"月刊薬事"17巻2号(1975)を第1回として"アメリカにおけるD I活動の史的展開"柴田彦章・他訳としてシリーズで各号に掲載されている。原著は本館にも所蔵している。訳者らによれば5つのシリーズ

表1. アメリカ医療サービス研究開発センターの部門、薬局関連計画ケース・スタディ・シリーズ

- NO. 1. DRUG INFORMATION: LITERATURE REVIEW OF NEEDS, RESOURCES AND SERVICES, DHEW PUB. NO. (HSM) 72-3013, by MARY J. REILLY, M.S.
 - NO. 2. CLINICAL PHARMACY SERVICES IN A COMMUNITY HOSPITAL, DHEW PUB. NO. (HSM) 72-3019, by WILLIAM E. SMITH, PHARM. D.
 - NO. 3. DRUG USE DATA: ASSESSMENT OF TERMINAL DEVICES, DHEW PUB. NO. (HSM) 72-3032, by JOSEPH D. Mc EVILLA, Ph. D. AND MARLANE GAINOR, M.S.
 - NO. 4. DRUG INFORMATION SERVICES: TWO OPERATIONAL MODELS DHEW PUB. NO. (HSM) 72-3030
Model I by CHARLES M. KING, JR., M.S., AND BETTY A. HELUMS, M.S.
Model II by VERN F. THUDIUM, M.S. AND ROBERT E. PEARSON, M.S.
 - NO. 5. PHARMACY SERVICES IN A GROUP MEDICAL PRACTICE (In preparation) by PAUL W. LOFHOLM, PHARM. D.
- (Information source: 上記 No. 4. Drug information services: Two operational models, DHEW pub. No. (HSM) 72-3030)

No. 5 (published)

Inclusion of pharmaceutical services in health maintenance and related organizations, review of supplemental benefits (with bibliographies). 1974. DHEW publication (HSA) 74-13017.

(Information source: Monthly catalog of U.S. Government publications, No. 969, Oct. 1975 #14983)

がアメリカ医療サービス研究開発センターの部門である薬局関連計画から報告書として出ているものを記載しているが、いずれの年か詳細な書誌的事項がないため調査した。

表1, No 5は5つのシリーズが出版される時点で“in preparation”となっているが、その後の調査しうる目録からはチェックできなかった。なお、表1, No 5の下に正しい書誌的事項と出典を付したのは後にNLMに調査を依頼して得た回答である。これらの出版物はGovernment Reportsであり、ペーパーバックで大衆に気軽に読まれる形態にあるにもかかわらず資料をさがす時には手間がかかる。

表1, No 1の著者であるMary Jo ReillyはAmerican Hospital Formulary Serviceの編集者でありAmerican Journal Pharmacyの“Drug Information Digest”の

項の編集も担当している。この本はcollinsのHandbookにもSewell¹¹⁾のGuideにももちろんとりあげられている。国家的な調査計画に基づいた偉大なreview articleであり、金居¹⁰⁾があげた各主要機関を包括している。

表1, No 2はSewellのGuideでは臨床薬理学ですぐれているMelmonのClinical Pharmacologyとともに臨床薬学および臨床薬理学のモノグラフとして推薦している。

表1, No 4は二つのモデルとなったアメリカの代表的D I活動を実際的なマニュアルとしてみることができ

る。モデル1, はUniv. of Alabama Hospitals and Clinics, Dept. of Pharmacyによる“A Complete Drug Information Service in a Hospital”となっており推薦

Name of Source	Equivalent Identification	Manufacturer	Market Availability	Prices	Adverse Reactions & Toxicity**	Toxicology#	Physical Incompatibilities	Dosage	Pharmacology & Metabolism	Therapeutic Use	Physical & Chemical Properties	Physical Identification	History	References to Other Sources	Our Library Location
* AMA Drug Evaluation	+	A	+	-	+	+	-	+	+	+	-	-	-	+	2
Dispensatory (U. S.)	+	+	+	-	+	+	+	+	+	+	+	-	+	+	2
* Extra Pharmacopoeia	+	+	-	-	+	+	+	+	+	+	+	-	-	+	3
* Facts and Comparisons	+	+	+	+	+	-	-	+	-	+	-	-	-	-	2
Index Nominum	+	+	-	-	-	-	-	-	-	+	-	-	-	-	2
* Medical Letter	+	+	-	-	+	-	-	+	+	+	-	-	-	+	1
* Merck Index	+	-	-	-	+	+	-	+	-	+	+	-	+	+	2
Pharmacological and Chemical Synonyms	+	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2
* Physicians' Desk Reference and Supplements	+	A	+	-	+	+	+	+	+	+	-	+	-	-	3

+ Information on this item usually included.

- Information on this item not usually included.

A Address provided as well as name of manufacturer.

* Core item for first consideration.

** Includes side effects, interactions, and contraindications.

Includes poisoning, antidotes, and animal toxicity.

Our Library Location

1 カウンター

2 文献調査室

3 学生参考

すべき基本的D I 参考資料リストが付してある。

モデル2, は Univ. of Michigan Hospital による "A Regional Drug Information Network" である。

Collins の Handbook が組織的に行なわれているD I センターが中心となっているのに対して Sewell の Guide はNLMのD I 調査報告¹²⁾をふまえた医学図書館を根底においたレファレンス・ツールであり、薬学を学ぶ学生のためばかりかD I 活動を行なうものをはじめとし医学図書館員の必読必携書というべきものである。

Winifred Sewell は Squibb Institute for Medical Research の Pharmacist Librarian であったが、1953年には、アメリカ医学図書館協会の Bibliography Committee の役員でもあった (Bull. Med. Lib. Assc. 41 425. 1953)。基本的なD I 図書をあらゆる角度から資料の情報源にアプローチできるようになっており、中でも最もわれわれが有用と思われるのは "Drug Handbook が質問にどの範囲まで答えられるか" の表である。この表をもとにわれわれが事実調査に用いられるよう研究していけば情報源のたしかなクイック・レファレンスが可能であろう。本館で所蔵しているD I 図書をこの表にならって作ってみたのが表2である。また Sewell の Guide に示されたD I 資料が医師をはじめ医療関係専門職の者がどのように必要としてきたか詳細にその有用性を知るためには I.D. Welt¹³⁾¹⁴⁾編集の Proceedings が参考となる。特にアメリカではすぐれているメーカー資料であるPDR, 医師の間で重要視されている Medical Letter, そして薬剤師向けのAHFS (American Hospital Formulary Service) などをはじめD I 資料の価値を研究報告⁴⁾した時にこの Proceedings の中からも汲み取ることができた。それはアメリカの医師やD I の権威者によって討議された内容をそのまま速記の形で記録したものであるからである。

今までふれてきた Reviews, Proceedings, Government Reports, Handbook, そして Guide にみられるようにアメリカのD I 活動の全貌が国家的レベルで掌握されているのに、日本のD I 活動が病院薬剤師, D I 室という限られた範囲にとどまり情報活動の発展が図書館資料とその活用という方向への広がりがみられないように思われる。

D I が病院薬剤師を中心とすることから Hospital Literature Index から文献をさがしてみた。本館ではこの資料はMLA Exchange によって収集しているもので、1977年の新しいものは入手していないのでチェ

ックできなかった。Index Medicus の MeSH では Information Service の標目下で Drug Information Service を検索するが、Hospital Literature Index は Library Service と Pharmacy Department の項目の下でさがした。この両索引誌から手作業で選んだ文献をその収載誌で比べてみると次の8タイトル誌が Hospital Literature Index からだけ得られた情報源であった。ちなみに国内所在目録 (医学・薬学) でその所蔵館を調べると現在表3のようにになっている。

表3. Hospital Literature Index のみに収載された DI 関係情報掲載誌とその国内所蔵状況。(薬学図書館雑誌総合目録1974と現行医学雑誌所在目録1977)

	収 載 洋 雑 誌 名	所蔵館数 ()内は 薬 学 系
1.	Drug Inform. J.	3
2.	Drug Intell. Clin. Pharm.	32(8)
3.	Can. J. Hosp. Pharm.	1
4.	Hosp. Formulary Manage	0
5.	J. Hosp. Pharm.	1
6.	Pharmacy Times	0
7.	Med. World News	7
8.	Missouri Med.	1

4. 日本におけるD I の現状と米国のD I センター

日本におけるD I の現状について今までにもふれてきたが、すでに前掲した "月刊薬事" の特集ドラッグインフォメーションにその流れの先端をみることができる。福室・他¹⁵⁾は医薬品情報資料は既製が主であっても全てを集めることは不可能であり、また書籍では新しい情報は得られないため最少限必要情報をファイル作成する。その自製資料の有効な整理活用が新聞等の切り抜きスクラップを含めて問題になっている。金尾¹⁶⁾がD I 活動における情報処理の問題でドキュメンテーションの仕事と考えられるもの最低6項目あげているが "国内創製のくすりならいざ知らず、ほとんど輸入したものばかりといった状態では国内文献だけではどうにもならない"。と資料構成と基準図書を選定、情報検索戦略の立て方という点でも再認識の必要を示している。

馬原¹⁷⁾は医学図書館と薬局のD I との協力に関心を示し、順天堂医院薬局の例をもとに現状の問題点をあげ、S D I サービスを含め資料の加工、処理は図書館の専門家にまかせるという形を提案している。いまだD I 室をもっていないようだが、質疑に対する回答は Merck Index とPDR以外は国産の各メーカーの能書集をはじめ“8種の tool で大部分得られる”と言っている。なおD I 専門家がみた日本の主要なD I 活動の現況報告は前掲の特集・ドラッグインフォメーション（上）にある。

L. E. Patterson¹⁸⁾によればD. J. Burkholder は1973年には Kansas City の Univ. of Missouri, School of Pharmacy の副学長であり、彼の指導のもとに合衆国で病院薬局と医療業務に適応したD I サービスを1962年に始めており、これが最初の正式なD I センターで、Univ. of Kentucky で開始されたといわれている。はじめのD I センターの目的は薬と薬物療法について医師に正しい信頼すべき情報を提供することであった。そして1972年9月には Univ. of Nebraska Medical Center でD I サービスが開始した。指導にあたったのは Assistant Professor of Pharmacy の Patterson¹⁸⁾でこの大学病院の中に Clinical Pharmacy Teaching Program をおき、薬学部の学生に講義をもった。質疑に答える彼らの基本的な情報源は8項目あげているがその中で用いられる雑誌は次のものである。

1) JAMA	6) J Am Pharm Assoc
2) New Engl J Med	7) Int Pharm Abst
3) Lancet	8) Current Contents
4) Drug Intell Clin Pharm	
5) Am J Hosp Pharm	

そして、この Univ. of Nebraska Medical Center における医学図書館の2,200雑誌とそれ以上の雑誌に接近できる。これはこのセンターが Nebraska 州をはじめ6つの他の州のための地区医学図書館としてサービスをしているのにほかならない。もちろんそれに加えてMEDLINEをはじめSUNY, ERIC, TOXICONなどの自分で検索できる図書館のコンピュータターミナルに接近できる組織が彼らの最終の情報源としてあげられている。いうまでもなく医学図書館のネットワークにのったD I 活動がある。わが国では現在のD I 活動が医学図書館のネットワークにのせるまでに問題があり、医学図書館自身のネットワークにも改良すべき点が多くあるように思われる。

5. 外国におけるD I 活動と図書館との協力

このことについては具体的に書かれたものは少なく、ここに二つの例がある。一つは英国の National Hospital for Nervous Disease の薬剤師 Gerard¹⁹⁾と Univ. of London, Institute of Neurology の医学図書館員がどのように協力しているか書いているものである。この国立病院はロンドン大学脳研究所に属している専門医養成の teaching hospital である。ベッド数283の小病院で、大病院に設けられたタイプのようなD I 活動を保証するにはあまりにも小さいので、薬剤部と図書館との専門的手腕を統合して効果的な活動を行なうというものである。彼らが受けた質疑は標準の仕事のコンサルタントでは答えられないものが多く、図書館員によってもっと深く求められる文献調査が行なわれる。抄録や索引されている情報源、自館にない原報の入手、必要となればMEDLARS機械検索を行なう専門家がいる。

そして協力の結果、薬剤部側の利益として1) 図書館が受け入れる出版物からスキャンニングサービスをすること。2) 薬剤師は図書館学の技術を受け入れる必要はなく、薬剤部に必要以上の雑誌（ここでは Brit Med J Lancet, New Engl J Med を一年間保管）や本を増やさないこと。3) 図書館員は資料について専門的知識をもっているから文献調査はよく行なってくれる、そして新しい出版物についての知識も薬剤部に流してくれること。一方図書館員にとつての利益は明らかでないが、専門的役割であるサービスの部分をスタッフが重んじることにあるといっている。この利用者層は専門医であるばかりでなく、他の病院からも質疑を受けている。その主な内容は7項目あげているが、D I 活動の内容の高度さがうかがわれる。

もう一つの例²⁰⁾はアメリカでD I センターを図書館のスペースの中において活動を行なうものである。Univ. of Tennessee, Memphis の Drug & Toxicology Information Center (DTIC) が Medical Units Library との協力によって新しい図書館の中にDTICを含めた。24時間営業で真夜中の図書館閉館時間は他の出入口につながる。これができるまでには両者は実際にいくらかの資料をDTICの方に移したり、利用の多いものはセンターにもう一部備えたり、貸出にも工夫をこらしている。また図書館での医薬品文献のための予算の中に資金をくみ入れたり、またDTICのスタッフは図書館のスタッフ・ミーティングや研修に参加するなど色々なプ

プログラムによって研究・実行した。利益は両者の管理部門に特に親密な関係をもつことで、アメリカでも他のD I センターと比べてこのケースは本質的に必要でのぞましいものながら常に存在できるものではないと結論して他に優秀な図書館の存在があってD I 活動がある例やいる。しかしD I 活動にとって医学図書館が重要であるといわれた文献を紹介している。

6. 札幌医大におけるD I との協力

具体的なプログラムによる協力関係はない。しかし本学はD. J. Burkholder²¹⁾²²⁾のKansas CityにおけるD I センターがteaching hospitalであることとgeneral community hospitalであることの二点でD I センターとしての活動の背景が以ている。彼のclinical pharmacy programの図はD I センターとして組織的に発展した基となったものであるが、それに及ぶものがあるかは明らかでない。本学薬剤部教授福島²³⁾は“薬事新報”に一年間毎月掲載されるD I シリーズの序説に図書館との関係にふれ、同薬剤部の秋山²⁴⁾も本学のD I の実際を紹介している。岡崎²⁵⁾は1973年日本薬学会（仙台）で医薬品情報検索のための索引を自ら作成し発表した。彼が所属する追分保健病院は本来大学病院とのつながりのない独立した診療を中心とした地方の小病院であるが、薬剤師として現況の医薬品情報に対してどのように対処すべきか書かれたものがある²⁶⁾。旭川D I センターの遠藤²⁷⁾も岡崎とともに毎月一回土曜日に本学薬剤部に出向いて午後から図書館に来る。ここでのコミュニケーションはD I についてよく知らない医学図書館員に特殊なD I 資料を解説してもらうほかに、問題になっているくすりを中心に治療に関する文献検索をとおしてお互いに意見を交換しあい、宿題を持ち帰ることにしている。しかし医学図書館員すべてが土曜日の集まりに参加できるというわけにもいかないので特定のケースといえよう。また薬剤師らにとって医学図書館とはどのように利用してよいのか、また大学に関係のない薬剤師はどのようにして医学文献を利用できるのか、こんなことも問題である。著者²⁸⁾は求められてD I シリーズに医学図書館の現状を紹介したが果してD I 活動を行なう人達の参考となるかは疑問である。しかしわれわれは医薬品をテーマに、情報はどのように分布し、新しい情報、しかも正しい情報はどのように求められるかを調査し報告してきた²⁹⁾³⁰⁾³¹⁾。

当初は図書館がD I に必要な資料を広範囲にわたって

収集することはしていなかった。薬剤部の予算で購入した資料は一旦図書館で整理するが、薬剤部で保管利用される。D I 室では確かに今必要としているものを専門のものとして購入する。学内に一冊あればよいという考えで図書館が医薬品に関する基本的な資料を備えずにいたのである。D I 資料の特性をよく知らなかったり、医薬品情報の検索を二次資料の抄録や索引にのみ向けているというようでは図書館といえども片手落ちのサービスになっていたといえよう。

現在では薬剤師とのコミュニケーションによってアドバイスをうけ、D I の基本的な資料を備え、岡崎薬剤師からはClin-AlertやMedical Letterの寄贈を受けている。

本学におけるD I 活動と図書館の協力は組織的ではないが、人と人とのつながりが情報の口頭伝達によって行なわれてきた。ある時は資料を受け取り、ある時は討議する。一つのテーマによって必要な文献情報の検索と資料の内容・分析調査の援助が今までのいきかたであった。われわれが協力する一つの形として図書館員自身の専門的能力による援助があげられるがこれには教育・訓練と日頃の努力が必要である。医薬品がそれ自身へのアプローチに色々な言葉や記号があるためにはじめから複雑であり困難がつきまとう。医薬品については消費者の一人としても、社会問題の一つとしても興味をもたなければならない時代である。コミュニケーションをとおして指導を受ける人材をもつことは図書館にとって優位であり、D I 活動への理解が深まり薬剤師への情報を的確に伝え得ると思っている。

7. 医薬図書館と職員の教育の中で

日本医学図書館協会は昨年1977年に50周年を迎えたが、相互の好意と恩恵によって支えられた相互貸借を中心にネットワークをもち、他の種類の図書館グループをしのいでその相互協力の発展を続けてきた。しかしわが国の医学図書館が本当にのぞましい医学図書館と呼ばれるものは数少ない。それは建物や名称からでなく内容システムと他との関係においてどうあるかという点から判断してである。その所轄当局が何よりの図書館の行動の決め手であるから他との関係と等しく協力関係に取り組む事は容易でない。これは他の医療機関で代表される病院図書室との関係も然りであり、何よりも組織機構がアメリカのHealth Science Libraryとのちがいにある。Univ. of Washingtonの場合はLibraryがD I センタ

ーを中にもち Dept. of Pharmacy がそれを運用しているといわれているから図書館のもつ性格・内容からちがっているように思われる。(Bull. Med. Lib. Assoc. 65 (2):216, 1977).

利用者にとって使いやすい図書館(二次資料の使い方指導も含む)、開かれた図書館(資料・文献の利用)、機能的な図書館(ネットワークにより情報・資料の迅速な入手)を管理運営していく図書館員自身の考え方も根底から正していかなければならない。

われわれの機関誌“医学図書館”は医学図書館員がどのようにあゆんできたかを一面からみせているものである。発刊当時から教育と訓練を中心にみていくと、われわれの指導者は早くも海外の先進国の教育にふれてきていかに努力してわれわれに教育と訓練の場を与えてくれたことか。津田は医学図書館員教育の急務で米国の医学図書館員を養成する教育をひれきし今日の予測にたったその必要性をといっている(医学図書館3巻1/2号, 1956)。また日本薬学図書館協議会と共催で“日本医学薬学図書館講習会”が開かれ(医学図書館3巻5/6号, 1956), これが第一回のスタートとして以後東京・大阪の二地区を中心に続けられてきた。その第8回(同誌10巻5号, 1963), 第9回(同誌11巻2号, 1964)の座談会では今後の講習会に対する意見が結集されている。

この頃を中心に1962年から3ケ年にわたり毎年ロックフェラー財団から Visiting Professors: Brodman, Fleming, Branchard による生物科学(医・薬・農を含む)図書館員現職者の研修が慶応大学文学部で行なわれ、全国の医学図書館からも参加した。これは今日の医学図書館を背負い、後輩を指導していく立場にあるものの大きな責任の一つとして当時なげかけられた試金石ではなかったろうか。医学図書館初級セミナー第1回(1962)から毎年続けられ、回をかさねる毎に各レポートも医学図書館の問題点をついてきており、中級セミナーも第4回(1977)を終了した。テーマの主たるものは医学図書館員として基礎的なものであり、二次資料の使い方、レファレンス・サービス、機械化、相互協力などである。少なくとも今から10年前までは薬学図書館との共催での講習会では今日ふれられていない薬学関係の資料についても勉強する機会があった。現在両者それぞれの道を行く感じだが、今こそ近接領域の生物科学分野、また特に臨床に関する薬学分野も当然含めて考慮すべき時ではなかろうか。専門化していく今日の学問体系の中で学際領域が重要視され共同研究というものが多くなっているこ

とも日常カウンターでの医師達の求める資料からもうかがえる。

日本の医学図書館がD I 活動に対して、文献探索指導の立場からも、また自分達の教育・訓練の場からも参画しなかったことは全く他との関係に対して図書館が組織的にも改造を考えてこなかったことにある。相手を知らずして協力はできない。図書館員の研修の中からD I 資料を含めた幅広い教育指導が実施されることがのぞまれる。

8. おわりに

従来から図書館の協力を必要としてさけられているD I 活動が医学図書館ではどのようにとらえられているか。またD I 活動についてはどのように理解すればよいのかをさぐってみた。特に日本の医学図書館との関係ではアメリカやイギリスの例からみても両者とのつながりが具体的にみるものがないように思われた。一つのセンタ的な役割をもって医学図書館のネットワークにのればよいとゆう状態にも至っていないようである。

医学図書館自体もD I は情報サービスの中の医薬品を中心とした情報サービスでありながら教育・訓練ではレファレンスサービス、二次資料の使い方などがあってもD I 図書という基本的なレファレンストウルになってくるとおろそかである。また組織的な相互協力にも改善を要する点が残っている。

そこで現在の薬剤部D I 活動との協力に際しわれわれがしなければならないこと、それは極めて原始的なことだけれども、このことによって互いに情報を交換し図書館員自身の専門性を生かしていけると考える。そして医学図書館はどうあるべきかが今後の課題である。

1. 基本的なD I 図書の特質と使い方、検索の方法を学ぶこと。

2. 自分の図書館に関係のある薬剤部とのコミュニケーションを密にする。特に人間関係、D I についての理解、医薬品関係の文献情報、資料提供において。

3. これらのことを医学図書館の組織的活動の中に統合する。特に医学図書館員の教育・訓練の中にくみ入れる。

おわりに日頃ご指導とご助言を賜り更にご校閲をいただきまして城西大学金尾素健教授に心から感謝の意を表します。

文 献

1) 福室憲治: 病院薬局における薬品情報(D I)活

- 動の任務と東京大学病院薬剤部における薬品情報活動. 医学図書館 20(3): 243—257, 1973.
- 2) 金尾素健: D I 活動と図書館. フェルマンシア 3(3): 144, 1967.
- 3) 金尾素健: D I のためのドキュメンテーション. 新薬と治療 №120—131, 1969.
- 4) 野口迪子・遠藤恵美子・岡崎俊朗・福島裕行: P D R 記載情報の関連資料は何か? —Amoxicillin を例にとって—. 薬学図書館 21(2): 104—111, 1976.
- 5) Collins, G. E. & Lazarus, H. L.: Drug Information Service Handbook. Mass., Publishing sciences Group, Inc. 1975.
- 6) 金尾素健: 医薬品情報学1976(城西大学, 講議テキスト, 1976) 私信による。
- 7) 福室憲治: 薬品情報活動(D I). 薬事新報 №878: 893—903, 1976.
- 8) 堀岡正義: 日本におけるD I 活動の歴史. 月刊薬事 19(10): 1751—1756, 1977.
- 9) 高杉益充: アメリカにおけるD I 活動の歴史と現況. 月刊薬事 19(11): 1989—1992, 1977.
- 10) 金居恭子: 医薬品情報活動. Lib. System 6(3): 250—272, 1967.
- 11) Sewell, W.: Guide to Drug Literature. Drug Intelligence Publ., Inc., Ill. 1976.
- 12) National Library of Medicine: Drug Literature. Am. J. Hosp. Pharmacy 22: 4—29, 1965.
- 13) Welt, I. D. ed.: Drug Information for the Health Professions, 1st Conference on Drug Information for the Health Professions. N.Y., Gordon & Breach, Science Publ., 1969.
- 14) Welt, I. D. ed.: Drug Information for the Health Professions, 2nd Conference on Drug Information for the Health Professions. N.Y., Gordon & Breach, Science Publ., 1970.
- 15) 福室憲治・大瀧満寿美: 医薬品情報資料の種類. 月刊薬事 19(10): 1803—1808, 1977.
- 16) 金尾素健: D I 活動におけるドキュメンテーション. 月刊薬事 19(10): 1759—1764, 1977.
- 17) 馬原春喜: 順天堂医院薬局における薬品情報(D I) 活動の現況と問題点. 第10回医学図書館員研究集会論文集 p. 210—216, 1975.
- 18) Patterson, L. E.: A hospital based drug information service and its role in teaching future pharmacy practitioners. Drug Informat. J. 7: 24—25, 1973.
- 19) Gerard, S. & Bailey, M. B.: Pharmacy-Library co-operation: a joint drug information service. J. Hosp. Pharmacy 32: 51—53, 1974.
- 20) Rivers, N. & Martin, J. A.: Drug information center in the medical library. Drug Informat. J. 8: 97—99, 1974.
- 21) Burkholder, D. J.: Practical aspects in the organization of a drug information center. Candian J. Hosp. Pharmacy 26: 69—70, 1973.
- 22) Burkholder, D. J.: The pharmacist as a source of drug information. Drug Informat. J. 8: 102—104, 1974.
- 23) 福島裕行: 札幌医大とその周辺のD I(1)序説. 薬事新報 №891: 1214—1218, 1976, 12月9日号.
- 24) 秋山 保: 同上(2) 札幌医大におけるD I の実際(I). 薬事新報 №897: 104—110, 1977, 1月20日号.
- 25) 岡崎俊朗: Index guide to drug retrieval の作成. 薬学図書館 18(4): 192—198, 1973.
- 26) 岡崎俊朗: 札幌医大とその周辺のD I(4)地方小病院におけるD I 洋書の必要性. 薬事新報 №907: 333—336, 1977, 4月7日号.
- 27) 遠藤恵美子: 札幌医大とその周辺のD I(5)旭川D I センターの実情. 薬事新報 №912: 479—485, 1977, 5月5日号.
- 28) 野口迪子: 札幌医大とその周辺のD I(8)医学図書館の立場から. 薬事新報 №942: 1233—1240, 1977, 12月1日号.
- 29) 岡崎俊朗・野口迪子: "Year Book of Medicine, etc." の二次資料における位置づけ. 薬学図書館 20(1): 9—16, 1975.
- 30) 岡崎俊朗・野口迪子・福島裕行: 著者名による情報検索における Review の役割. —Prolactin を例にとって—. 薬学図書館 21(2): 119—126, 1976.
- 31) 岡崎俊朗・野口迪子・秋山保・福島裕行: レター情報から見た Abridged Index Medicus の有用性. —Levamisole の免疫刺激作用の文献をめぐって—. 薬学図書館 22(1): 12—23, 1977.